高田教区宗祖親鸞聖人
七百五十回御遠忌テーマ・
教区教化テーマ

私はどこで生きているのか
～たずねよう 真宗の教えに～

高田教区報

響流

第126号

発行所
上越市寺町２丁目24-4
真宗大谷派 高田教務所
編集　響流編集委員会
発行　森田成美
印刷　サクラ印刷㈱

高田教区同朋大会
「私はどこで生きているのか　～たずねよう　真宗の教えに～」

教化委員会幹事　第七組極生寺　尾﨑秀行

去る九月二十日、高田別院本堂において、私の記憶する限りでは十五年ぶり、第十五回となる教区同朋大会が開催された。

今回の大会は、昨年度一年をかけて策定された、第十一次三ヵ年教区教化テーマであり、教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌テーマでもある「私はどこで生きているのか～たずねよう　真宗の教えに～」ということばに込められた願いと背景を共有していくことを目的とするものであった。

教化幹事長鷲嶺紀文氏の大会趣旨の説明があり、引き続き講師としてお迎えした高山教区不遠寺住職の四衢亮氏に教区教化テーマと同一の講題でお話しいただいた。

四衢氏のお話は既に教区にはお伝えしてある「テーマの趣旨と願い」（高田教務所報二〇一二年度版、二十八頁～）を、お聖教を通して確かめ深めてくださるものであり、教化テーマを教区御遠忌にむけてどう展開していったらよいかということについて大きなヒントを与えてくださるものでもあったと実感した。

氏のお話の要旨のごく一部ではあるが次に記させていただく。

私達の求めてきたものは面倒なこと煩わしいことはみんな他からやってもらえる世界であり、便利さを追求していくうちに結局、孤独な無縁社会に埋没していってしまう。そのような姿を「他化自在天」「兜率天」または「地獄」ということば（状態）として確かめ、そのようなところに甘んじている我々の「世間」を知らしめ、問うていくのが仏教であるとおさえられた。

しかしその仏教さえも世間の教えにすり替えられ（天に合わせようとし）ていくと仏教とは異質なものになってしまう。

氏は原発事故問題ともリンクさせつつ、このような語りを切り口に、さらには同朋会運動の在り方、目指すところも示してくださった。

紙面の関係もあり、その詳細をお伝えすることはできないが、教区御遠忌を共にお迎えするという意味からも四衢氏のお話を今回ご参加いただけなかった方々にも是非、活字化してお読みいただくことができればと切望するところである。

ひと 42

今回は、今年で開設四〇周年を迎える現在の池の平青少幼年センター（以後、センターと略す）の開設に関わられた第六組樹徳寺の住職、塩谷利英氏にお話を聞かせていただきました。

◆塩谷さんは、センターの開設に大変ご尽力されたとうかがっております。どのような経緯からセンターの開設が持ち上がったのでしょうか。

センターは一九七三年（昭和四十八年）に開設されましたが、センターを開設しようという動きは昭和四十五年頃から始まりました。当時、青少年活動が停滞気味になり、それを嘆いてなんとかしようと、その当時の内局と青少年部が多くの青少年が集まれる場所を作ろうということになったのです。全国で能登や琵琶湖などいくつかの候補地がありましたが、屋外での活動ができる施設を作ろうということで検討を重ね、池の平に決定しました。

私はその頃まだ、直江津で教員をしておりましたが、センター主任をお引き受けするにあたり、青少年活動のビジョンを論文に書き、本山へ提出し、その信念を基に十八年の間、重責を務めさせていただきました。

◆センターの建設工事はどんな様子でしたか？

センター主任に就任するにはセンターができてからになりますので、実際には、主任になる前から開設に関わったことになります。

センター建設予定地で、まずは野営ができるようにしようと草刈をしたときのことです。当時のことだから、大きな鎌を使って手で草を刈るわけですが、仲間四人と汗水を流し、ようやく作業が終わったところで、草を刈った場所がセンター建設予定地の隣りのよそ様の敷地であることに気づき、がっくりしたことがありました。

建設工事が始まると、私は仮小屋を立てて毎日高田から通い、作業を見守りました。予算が限られていたので業者にまかせるだけでなく、自分でもチェーンソーで木を切り倒したり、ブルトーザーで地面をならしたり作業に協力しましたが、思えばあんなことよくやったなと、今なら恐くてできないようなことも当時はやっていました。

◆センターが開設されてすぐに利用者はこられましたか？

はい、当初からたくさん利用していただきました。定員五十五名、一泊二食二千円、米持参なら千八百円でした。キャンプは五十円程度でしたので野営の方が多かったです。

センター開設前の建設途中でも、ボーイスカウトの皆さんは野営にきていました。敷地内に湧き水が出ていましたので大変役立ちました。

便所も野外でした。穴を掘って、一番厚いベニヤ板をくりぬき、チョークで足形を書いて穴の上にかぶせてつくりました。木の近くにつくると、手すりになりましたので大変使いやすかったです。そして、使ったベニヤ板は、キャンプファイアーの時に一緒に燃やしました。

今思えば、このときが野外施設としては一番充実していたように思います。

◆センターが開設されてから苦労されたことは？

開設にあたり、防火管理者の資格をとらなければなりませんでした。また、施設の利便性を考えて食事を出すことになり、調理師の免許を取らなければならなくなりましたが、なんとか営業許可をいただくことができました。

国立公園なのに届け出を忘れてキャンプファイアーをして怒られたことがありました。

屋根雪のせっぴを落とすのに管理

人さんの畑山さんと知恵を絞り、釣り糸で切って落としたことがなつかしく思い出されます。切り落としたら、入り口の扉が二枚とも吹っ飛んでしまいました。もし放っておいて事故がおきたならば大変な被害になったであろうと胸を撫で下ろしたこともありました。

屋根落雪の風圧による扉破損（1977年）

◆温泉にも入ることができるのはありがたいですね。

食堂の向かいに当初より小さな男女兼用の風呂がありましたが、温泉ではありませんでした。やはり温泉に入りたいということで、そこで、温泉を引こうということになりました。

しかし、温泉を引くには権利を得なければなりませんので、いろいろと苦労しました。ようやく引き込むことができましたが、温泉がぬるくて入れないほどでした。それでボイラーを入れて沸かして使うことにしました。せっかく温泉を引いたのだから、男女別の風呂場もつくり、温泉の雰囲気を出すために温泉の湧出口にこだわり、そこだけは自然石を積んでつくりました。

◆開設されてから、これまでに多くの方に利用されてきているわけですが、今後の青少幼年センターにどんなことを期待されていますか？

自然のすばらしさを次の世代の子ども達にどう伝えていくかは理屈ではなく、体験を通し伝えていくことが大切だと思います。

このようなことがありました。横浜から子ども達がセンターに来たときのことです。事前にタモと虫篭の用意を依頼されていましたが、私はあえて準備をしませんでした。そして、センターに到着した子ども達とウツギの木を輪にして紐で縛り、クモの巣をさがしてからませてタモをつくりました。作り方と同時にクモが餌をどうやってとっているかまでわかり、子ども達は池の平のおじさんにすごいことを教えてもらったと横浜に帰ってからも大喜びだったそうです。

野外活動風景（1982年頃）

開設当初、センターは野外研修道場と呼ばれていました。大自然の中での活動は、登山やキャンプも含め危険と背中合わせの場合もありますが、細心の注意を払い、勇気を持って冒険していってほしいと思います。

最後にセンターは旅館ではないので宿泊施設や食事を第一に考えるのではなく、研修道場であるということを忘れずに、その願いを貫いてほしいと思います。

長時間に渡りお話をいただきましてありがとうございました。

塩谷さんは、センターにここまで関わることになったのは、願いを託された責任からであるが、センターの熱狂的な信者のようだったと振り返っておられました。しかし、青少年教育の重要性を深く理解しているがための情熱が行動の原動力になっているように感じられました。

気軽に利用させていただいているセンターがこのように様々な歴史・苦労があって今ここにあることを知り頭が下がる思いがしました。

（矢嶋・淀野）

塩谷氏を囲んで（当時）

高田別院・新井別院報恩講

「高田別院報恩講にお参りして」

第八組養林寺門徒　清水　四郎

第八組一ブロックAの秋季研修の一貫として高田別院報恩講初日の十月五日、出仕担当組が第八組ということで参詣させていただくことに決まり参加させていただきました。

私にとって、別院の報恩講にお参りするのは初めての体験でしたので緊張と期待の大きな一日でした。

予定の午後一時三十分になると、雅楽が入り、重重しい雰囲気の中を龍笛の音に合わせて、外陣そして内陣が一杯になりました。やがて本堂を飲み込むような、しかも一糸乱れぬ読経が始まりました。さすがにこんなに大勢の唱和は初めてでしたので、響き渡る迫力にはびっくりし、おおいに満足感に浸ることが出来ました。

続いて金子正美氏の法話は、報恩講は親鸞聖人の法要であること。門徒にとって大事な集まりであること。「聞くというは信心をあらわすみのりなり」と「聞くということ」の大切さについてわかりやすいお話をいただきました。併せて紹介された東井義雄氏の「忘れていた　忘れていた」の詩は、読めば読むほど含蓄のあるすばらしい一編であると思います。充実した時間を過ごすことが出来たありがたい一日でした。

「新井別院報恩講」

第七組浄善寺（岡川）　関　英隆

今年も新井別院の報恩講（おたや）が、十一月一日の初逮夜より四日の満日中までの三昼夜にわたり厳修されました。

本年度も例年通り二日には、ときわ保育園の園児参拝と全戦没者、物故功労者追弔法要。三日には、稚児行列と恵信尼公堂法要。四日には、納骨堂法要と、三昼夜の日程の中に特別法要を入れながら、報恩講を厳修いたしました。時折、強風と雨にみまわれ庭儀等ではご迷惑をおかけしたこともありましたが、無事に円成することができました。

九月の打合せ会に始まり、別院の清掃奉仕、仏具のおみがき、手伝いの依頼、食材の準備等々、数多くの門徒の方々の縁の下の力持ちとしてご協力とお力添えがあっての新井別院報恩講円成だと思います。

寒さや悪天候のためか、参詣の人たちや、組内のご住職の出仕が少ないように思いましたが、森田輪番が最後の満座式のあいさつの中で、「一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なる事にてはなく候う。一人なりとも、人の、信をとるが、一宗の繁昌に候う。」（『真宗聖典』「蓮如上人御一代記聞書」八七七頁）と引かれ「大勢の人たちが集まることだけが大事ではなく、大切なことは報恩講をお勤めする一人ひとりの心持と自覚です。」とのお話をいただきました。

私たちが報恩講を勤めるということは、（宗祖としての親鸞聖人に遇う）ということであると同時に（真宗門徒として自覚する）ことだとあらためて知らされ、来年からの報恩講に臨みたいと思います。

「子ども報恩講」

第四組養性寺　内山　真明

今年の高田、新井両別院の子ども報恩講がおこなわれました。「ジャックの会」の絵本の読み語り、エプロンシアター、紙芝居。特にエプロンシアターは見たことがない子ども達が多いらし

く、食い入るように見ていました。

ゲストとして本山から「鸞恩くん」が遊びに来てくれました。子どもにも大人にも人気があり、一緒に写真撮影をしたり「ジャックの会」のお話を子ども達とともに聞いたりと結構な存在感を出していました。子ども達からは「バイバイ、来年も来てねライオンさん。」という声もあった「鸞恩くん」の参加でした。

そして「境内宝捜し」。スタッフが身と時間を費やして作った両別院の地図は、別院職員が気付かないマニアックな所を突いた地図となりましたが、子ども達には割とアッサリ見付けられたみたいです。

今年も多くの参加者、スタッフのおかげで両別院で子ども達の笑顔と元気な声が花咲きました。来年も多くの子ども達の参加を期待したいとおもいます。

得度受式者の集い
「出仕してわかったこと」

第六組善念寺　小四　滋野（しげの）　唯賢（ゆいけん）

高田別院のほうおんこうでわかったことは、二つあります。一つ目は、おまいりの人がいっぱいいたので、とってもきんちょうして、大きな声が出せませんでした。二つ目は足がしびれて、かんかくがなくなったほどです。でもちゃんとできてとってもよかったです。

「得度受式者の集い」

第六組雲妙寺　小四　岡田（おかだ）　将希（まさき）

僕は今年八月に得度を受けました。高田別院の報恩講でお経を読むことになりました。たくさんのお参りの人が来ていたので少しきんちょうしました。大きな声でお経を読めてよかったです。記念品をもらった時ドキドキしたけどうれしかったです。終わったら家族が、「がんばったね。おめでとう。」と言ってくれました。家の報恩講でもがんばろうと思います。

聞思学場―研究生意見発表―
「聞思学場を通じて」

第十三組最尊寺　千名　琢爾

高田教区真宗教化研鑽室聞思学場の二期生の研修が始まって一年半余り。私たち二期生は『宗祖親鸞聖人』を基本テキストとし、聖人の生涯を通じて、その歩みから真宗の教えに触れている。これまでに第一章から第四章（人と生まれて・発心・道を求めて―懸命の修学と六角堂参籠）までをみてきたが、今回ここに私が学び感じたことをまとめる形で研修の報告をしたい。

三帰依文に「人身受け難し、いますでに受く」とあるが、私たちは自我が芽生えたとき既にこの人間社会に存在しており、人としての「生」を稀有だとか特別な意味を持つことか考えぬまま生きているように思う。一方、「死」が必然であることは皆が知る事実で、逃れられぬ「死」を意識するところから、今生きるこの「いのち」の在り方を問うていくという者は多いのではないか。それは老いや病、理想とする人生と現状との相違に悩むときや他者との関係のなかでの自身の存在価値を問うたときなど、多くは苦悩を抱えたなかからであろうが。

ただ、現代は「死」そのものや与えられ、支えられるかけがえのない「いのち」ということが実感しにくい時代である。核家族化で身近な者の老いを感じにくいうえに多くが臨終を医療機関で迎え、またゲームなどバーチャル世界での「生と死」に慣れ過ぎて現実世界での「いのち」の重さを感じ取りにくくなっていること。さらに地域社会はもとより、家族や友人の関係でさえも希薄なうえ、個を尊重し過ぎて自己を律し他

を思いやる心を軽視する風潮。このような社会のなかで、いざ「生と死」や「いのち」に向き合うことになったとして、私ならば果たして問いの迷路から抜け出せるだろうか。

そのことに何らかの道筋を見出させてくれるものの一つが、激動の時代を衆生と共に生き抜いた聖人の歩みなのではないか。当時は戦乱や飢饉などで死者が溢れ、何一つ思い通りにできぬどころか、その日一日を生き抜くことに精一杯であったという。常に「死」を意識せざるを得ない状況ならば、「いのち」の在り方やその意味を問わずにはおれなかったはずである。想像を絶する苦難のなかから生まれた問いならば、その答えが時代は違えども私たちの道標に成り得ると。

聖人は明確な意志を持って発心（出家と比叡山入山）をしたわけではないようだとのことだが、出家を機に仏の教えから「いのち」と向き合う仏縁を得た。その頃の大乗観は、一人が悟りその他多数を引っ張っていくような感覚だったといい、聖人もその大乗観に乗っ取り自らが生老病死の苦悩を超越し人々を導くため、世との交わりを断ち厳しい修学に励む日々を送ったであろう。しかし、俗世に塗れ財や名声を求める僧を眼にし、また聖人自身は難解な学問のようなかたちで仏教を学び修行に明け暮れても消せない欲望を抱える。いつしか比叡山での仏道に疑問を持つようになったであろうことは、聖人が見たとされる三夢告（内容は省略）から推察できる。夢は観念的で根拠に欠けるが、思い続ける事柄や潜在意識が夢というかたちで表れるという見解があり、宮城顗先生も夢告を「夢に見るほどの求道心」として、聖人のまことを求めたいという強い願いが夢告というもので表れたと言われたとか。これを根拠として、「磯長の夢告」から前述した疑問を抱いていたとみる。その問いを日本に仏教が根付く大業を果たした聖徳太子ゆかりの御廟に参籠することで尋ね、求めるべき仏道とは何なのかを模索していたと。また「大乗院と六角堂の夢告」。大乗院は女人禁制の比叡山中にあって女性を祀り、六角堂は在家生活のなかで仏道を歩んだ太子ゆかりのお堂という。この夢告には男女の別や妻帯というありのままの社会生活を送る行為に対し、救いに分け隔てがあることへの問題意識があったと。これらを促しの一つとして、やがて出家のかたちをとらずとも、欲望に塗れた姿であっても、女性であっても救われる教えを求める決意を固めたのだろう。

「僧に非ず」とは、その後比叡山と決別した事実からみても限られた者にしかできぬ出家や厳しい修行はあるべき仏道の歩みではないとのことではないか。また「俗に非ず」とは、苦難の絶えぬ俗生活や「いのち」の問いの迷路から解放してくれるものは仏道の他ないとすることではないか。のちに聖人は在家生活での仏道の歩みと「ただ念仏」を求めたまことと見出し、そのなかで「いのち」と向き合った。七高僧らにより脈々と受け継がれてきた全ての人々が分け隔てなく救われる真の大乗観に聖人は立ち、そして今私のもとにもその教えが真宗（まことのむね）として届いた。

人としての「生」を問い、今生きる「いのち」と向き合うために真宗の教えから私が何を得ていくのか。聖人の歩みを思い描いても未だ見えぬものばかりで、自らの言葉で多くを語れない。だからこそ聞思学場を通じ自身の道標となるよう問い続けていきたい。以上、甚だ稚拙ではあるが研修報告とする。

参加者のひろば

伝道研修会

「伝道研修会に参加して」

第二組來遊寺　笠原　秀抱

伝道研修会に初めて参加しました。場所は妙高高原の青少幼年センター、出席者は十名弱でした。平日のせいもあり、若い方の参加は少なかったです。

寺を継ぐものとして法話は必要欠くべからざるものです。でも、私は話し方があまり上手ではありません。自分の思っていることを十分に相手に伝えることができません。すこしでもそれらのことが改善できればと思い、この伝道研修会に参加しました。

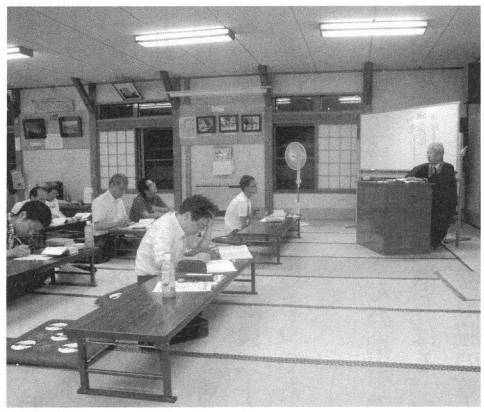
一日目は大無量寿経上巻を全員で読経することから始まりました。普段読み慣れてないので周りの声についていくのがやっとでした。夕食後の講義Ⅰは自分がイメージしていたのとは異なっていたのに戸惑いました。自分としては経典の本文と照らし合わせての解釈の説明を想像していたからです。

二日目は大経下巻の読経から始

まりました。その後、講義Ⅱ・質疑にはいりまして、この講義を聴くことによって自分が今置かれている環境に混在する諸々の問題が思い起こされました。

伝道研修会に、参加するまでは全体を把握できず、結局、最初の参加は始終戸惑いのままでしたので、回を重ねて会の形を理解したいと思います。

今度は十一月末にあるこの会に参加してさらに研鑽を深めていきたいと思います。



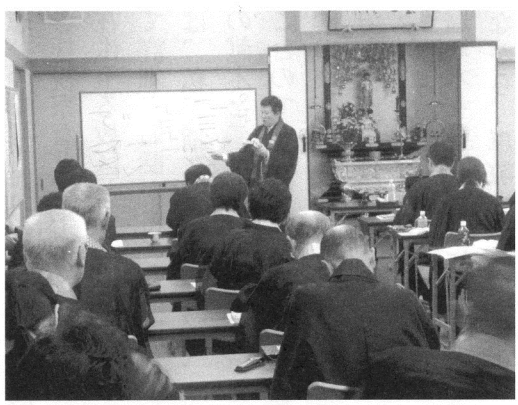
声明作法講習会

「声明作法講習会に参加して」

第十二組専徳寺　**松村　弘**

九月二十四日、二十五日と本山本廟部堂衆の松村大栄氏を講師に迎え、教区声明講習会が開催された。内容は、葬儀、各種法要、報恩講等で依用する和讃の読み方について教わった。

私は普段、一人、もしくは決まった人とお勤めすることが多い。そうすると誰にも注意されることがないので、気が付かないうちに自分の読みやすい様に、勤めやすい様にお勤めをしてしまう。それが身についてしまうことを〝クセがつく〟と言うのだろう。講習を受ける度に、自分勝手なお勤めをしていたのではないかと問い、確認する作業を繰り返している。



そもそも大谷派の声明は、音楽の用語を使うならば、単一旋律による斉唱（複数の人が同じ旋律を歌うこと）である。斉唱には歌の歌詞を、言葉を強調して聴衆に伝えるという効果があるそうだ。複数の人が異なる音程でお勤めをすると、それは合唱となり大谷派の声明とされるものではなくなってしまう。

クセが当たり前になる前にもう一度聞き直す、そんな場所であった声明作法講習会であった。

教区門徒会研修会

「教区門徒会研修会に参加して」

第十二組最尊寺門徒　**西脇　弘**

今年四月一日教区門徒会員に就任して第一回目の研修会が九月二十五日、二十六日に開催され参加した。

新井別院様及び第七組二俣西蓮寺様、関川淨善寺様を参詣し各寺の歴史、雪害対策等の説明をお聞きしその後池の平青少幼年センターへ。

研修会は門徒研修部門主任・直江智成氏より「門徒会委員としての地位（立場）」、教区門徒会副会長・平野宏氏からは「同朋の会へのとりくみと問題点」の研修を受けた。

研修会後、二班に分かれての座談会が実施され、私は第二班に参加したが、各組の門徒会員から「同朋会の認知及び活性化をどのように図るか、推進員連絡協議会との連携、若い人たちへの声がけ」等、多くの意見が出た。

振り返ってみれば私の子供の頃はお寺の行事があると親に連れられ参加し、住職にほめられ「ほとけさま」に手を合わせお菓子等頂くのが楽しみであった。ラジオ体操も境内で行い、印を押してもらうのが励みとなり休まずお寺へ行った。

しかし世の中が大きく変化し門徒ですら「お寺の存在」を忘れかけてきている。当寺でも種々の行事を行い交流を図るようにしているが今一歩である。

高田教区のテーマである【私はどこで生きているのか～たずねよう　真宗の教えに～】に対して自分の努力不足を感じ反省する研修会であった。

関川　淨善寺

報尽為期碑清掃

「報尽為期碑で法要を営む」

高田教区推進員連絡協議会長
第十二組明善寺門徒　八木　司

平成二十四年九月三十日、報尽為期碑の前で法要を行った。当日八時、軽トラに背負式草刈機・竹箒・びびら・箕を乗せて、吉川区尾神のみはらし荘前の駐車場に向う。私が最初に到着、皆さんの集合を待つ。寺方七名・坊守さん三名・推進員二十名が、車に用具を乗せて集まって来られる。

朝川組長（教念寺）さんの指示で、全員が車で清掃場所に散らばる。一・五キロ程の舗装された参道脇の草刈り作業、男性の主力がその作業にあたる。丘の上の報尽為期碑の周囲や階段は、三名の坊守さんに掃き掃除をお願いし、私達男性三名は下の駐車場周辺の草刈りをする。

十時半、作業の片付いた人から、駐車場に車を置き階段を上って報尽為期碑周辺に参集される。お茶を頂いて一息ついたところで松浦副組長（法西寺）さんの進行で法要を営む。

組長さんの導師で同朋奉賛式第二を唱和、終って法話は関沢敏美（明善寺）さん。A4の資料三ページ、かつての組長時代の記録を整理され、参道の舗装、報尽為期碑と階段の改修、二度にわたる門首御夫妻のお忍びの参拝、熊谷宗務総長（当時）の参拝視察など、平成十三年頃から現在に至る教区と十二組の対応について詳細なお話があった。閉会の言葉は、私が指名を頂いたので、「明治の献木と二十七名の殉難は忘れ去ることのできない歴史であり、法要と碑の維持管理は我々に課された責務です。次世代に継承していきましょう。」と話して法要を閉じた。

遥か木々の向こうに居多ヶ浜を望みながら、専敬寺の奥様手作りのケーキを頂き、階段を下りた駐車場では、思いがけず糸魚川の中村栄美子さんの紙芝居、親鸞聖人にまつわる民話三編を聞かせて頂く。誠に爽やかな秋の日を過ごさせて頂いた。

合掌

解放推進委員会公開学習会

「安全神話と必要神話の崩壊」

第八組延壽寺　鷲嶺　紀文

二〇一一年三月十一日の東日本大震災と引き続く原発事故以来、時間が止まったままの状況の中で生活を続けている人が大勢います。我が身の無力さを恥じつつ、心が痛みます。

十月二十四日、解放推進委員会公開学習会で長田浩昭氏の「原発は差別!?―原子力神話（鬼神）からの解放―」を聴講しました。私にとっては前夜の仏青公開講演会から引き続く聴講でした。豊富な資料と工夫された映像を駆使した説得力のある話で、福島の原発災害が人災であることがよく分かりました。これまで「原発は必要」「原発は安全」という神話を信じ、便利な生活を享受した私たちです。しかし、それが虚構であったことが、得心できました。

昨年十月三日より朝日新聞で連載されている「プロメテウスの罠」を読んでいますが、あのとき何が起こっていたのか、そのあとどんなことがあったのか、講演の内容と併せて明らかになったように思います。

最後に、長田氏の著『原子力神話（鬼神）からの解放』冒頭の「原発事故は人間の生き方の問題として認識されなければならない」という指摘を改めて重く受け止めています。

秋安居

「秋安居に参加して」

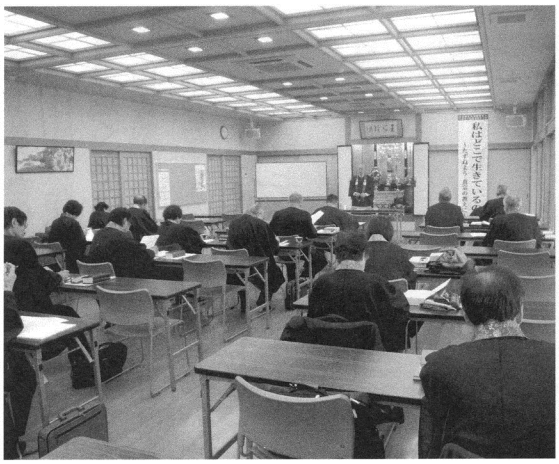
第六組本浄寺　吉田　晴正

世親の浄土思想をご専門とされる小谷信千代先生のお話を聴講したが、改めて、中陰（七・七日）法要の大切さを学ばせていただく機会となった。

近年、「生」への意義が実感できないとか、「死」を想うことが希薄という傾向にある。その現象が家族葬や直葬の増加に見られるという。経済的負担や世間的付き合いを嫌い葬儀の簡便化を図ったり、偲び別れする

機会の提供を避けたりする喪主の責任放棄等が起因していると分析される。そのため、身近な現実的事柄としての「死」を機縁として浄土往生という教説を実感し得るように努めなければと力説される。

古い仏教では、人間の命を四有と区分し、「生有」「本有」「死有」そして死亡して次の世に生まれかわるまでの期間「中有」（中陰）とした。浄土経典では、この生まれ変わるという輪廻転生からの解脱を説く。中陰の機会は、分別から離れ浄土世界に往って生まれ成仏することをきちんと教える場でもある。高僧和讃（曇鸞）や現世利益和讃を紹介されながら分かり易く講義された。



教学研修会

教学研修会に参加して

第十三組福淨寺　井上　一英

和讃は、日々ふれていながら、なかなかじっくりと腰をすえて読むことがないものだということを、つくづく感じた。

親鸞聖人が何の根拠もなく、自らの感想を和讃にしたはずはない。しかしその一語一語を丁寧にいただくということが、日常の中で忘れてしまっているのだろう。

三木先生から、今回は「観経和讃」についてご講義いただいた。九首の和讃のどこに問題点を見出すか。これらに通じている課題は何か？王舎城で起きた逆害を、悲劇としてではなく、仏教の道理によって起きた出来事として見ていく。悲しい事件という感傷を交えず、経典の中の題材として見直す。親鸞聖人はこのような姿勢を持って「観経」を読み、和讃をつくられたと言う。「王舎城の悲劇」という言葉で、あってはならない事件が起きてしまったという感傷を交えて、この出来事を見ていたのかもしれない。経典の物語として大事にする余り、経典にまでなった物語である本質を見ることを忘れてしまっていた。私には大切な指摘をいただいた講義だった。

青少年キャンプ

「楽しかったキャンプ」

小学四年生　仲鉢（なかばち）　麻希（まき）

キャンプで一番楽しかったのは、キャンプファイアーです。

いろんなだしものをして、そこが、楽しかったです。

とくに、おもしろかったのは、やっぱり、自分たちの、だしものです。「いつ」「どこで」「だれが」「だれと」「何をした」で、あべこべの文を作る、出しものです。その中で、一番わらったのは、「ゴールデンウイーク」「東京スカイツリーで」「みかわ　けんいちと」「マツコデラックスが」「ウッチー（スタッフさん）をぬがした！」です。みんなすごくわらっていました。（けっさくです！）

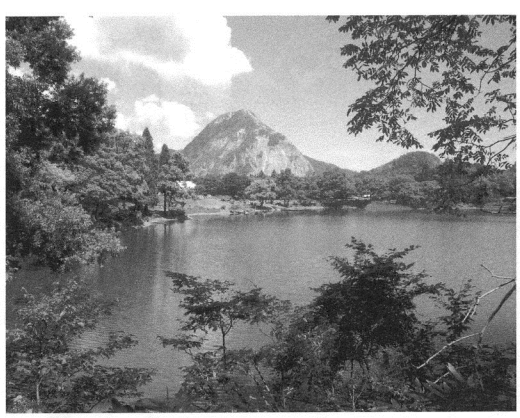
もう一つ楽しかった事は、ヒスイの湯の、温水プールです。おにごっこをして、あそんだので、とってもたのしかったです。

キャンプは、一生の思い出になりました。

「はじめてのキャンプ」

小学四年生　保坂（ほさか）　梨吏（りり）

わたしは、今年、はじめて、「第二十九回　高田教区青少年キャンプ」に行きました。



わたしが一番楽しかったのは、キャンプファイアーでやった「いつ　どこで　だれが　だれと　何をしたか」のゲームです。ほかにも、すみさんや、

ゆっきーとねたのも楽しかったです。二泊三日は長いほうだけど、わたしには、短くかんじました。みんなで協力してごはんを作ったりするのも楽しかったです。はじめてだったけど、みんながささえ合ったりしてくれるから、とても安心できました。また来年も行きたいです。

「はじめてのキャンプ」

小学四年生　佐藤（さとう）　叶佳（きょうか）

わたしは、はじめてのキャンプで、友だちもでき、たいへんな事もあったけど、みんなと協力して、とても楽しい、けいけんをしました。

一日目の大雨で、暗くてこわかったりしたけど、みんなといっしょにいたからだいじょうぶでした。

二日目のキャンプファイアーも、みんなで歌ったり、出し物をしたりして、とても楽しかったです。

はじめての事がたくさんあったけど、みんなで教え合ったり、協力し合ったりしてとてもじゅう実したキャンプでした。

「心にのこったキャンプの思い出」

小学四年生　山崎（やまざき）　志桜（しおん）

私がキャンプで、一番心にのこっていた事に二つあります。

一つ目は、化石さがしと、ヒスイを見た事です。化石さがしでは、最初は、見つからなかったけど、いっしょうけんめいにさがしたら二つ見つけました。すごくうれしかったです。化石は初めて見たので、このたいけんができて、とてもよかったです。

二つ目は、キャンプファイアーです。班でなにか出し物を出す時は、三班が一番おもしろかったです。「いつ」「どこで」「だれが」「だれと」「なにをした」の出し物をしました。一番最後がおもしろかったです。

私は、初めてのキャンプだったので、少しふあんもあったけど、友達もできたし、スタッフさんも、とてもやさしかったので楽しくできました。夏休みの一番の思い出になりました。また来年もこのキャンプがあったら、ぜったいに行きたいです。

「初めてのキャンプ」

小学四年生　内山（うちやま）　穂乃（ほの）

私がキャンプに行って楽しかったことは、三つあります。一つ目は、キャンプファイアーをしたことです。キャンプファイアーをしたのは、初めてだったので、すごく楽しかったです。二つ目は、プールに入ったことです。三はんの子とわたしの友達と遊びました。おにごっこをしました。三つ目は、友達とねたことです。みんなでねれてうれしかったです。初めてのキャンプだったけど、すごく楽しかったです。また、らい年もいけたら友達といきたいです。

高田教区震災支援有志会

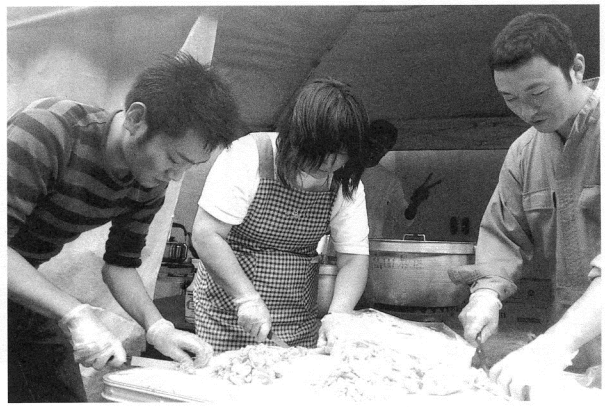
高田教区震災支援有志会事務局　豊島　信

「お前たちがなまじ除染なんかするから福島から避難しようとする人たちが躊躇するんだ。」

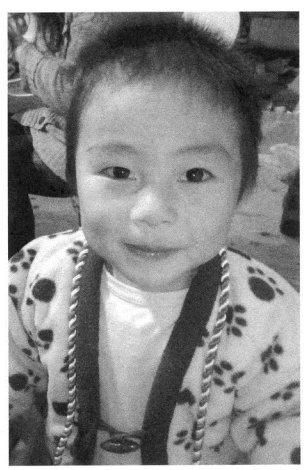
地元に残る決意をした、福島県二本松市真行寺の佐々木さん一家が、県外の人からいわれる言葉だ。時として、反原発団体からもいわれる。避難することを絶対的な善とする立場からのことだ。

線を引くことができないこの原

発事故は、一人ひとりの判断しか頼るところがない。岩手、宮城が結びつきを一層強くしていくことに対して、福島はバラバラになっていくといわれている所以である。佐々木るりさんの手記を紹介したい。



「子どもとお金を天秤にかけてお金を選ぶ親がいるのでしょうか？うちには九十四歳の重度の認知症のおばあちゃん、義理の父、ここ（寺）を心のよりどころとしている大勢のご門徒さん、幼稚園に通う百名弱の子どもたちがいます。私はこれらをすべて残し、避難など到底できないのです。みな子どもが一番大切に決まっています。だけど天秤になんてかけられない多くの命とともに福島で生きているのです。だからこそ、ここで子どもたちを守るために、自分たちで食品の放射能を測り、週末や長期休みは県外保養をし、除染をし、内部被ばく検査をし、そうしながら暮らしているのです。正義や善意から出る、福島に住む人間を批判する言葉が、どれほど福島から避難できずに苦しんでいる人間の心にさらなる苦しみの追い打ちをかけるか、ほんの少しでいいから想像力を働かせ、寄り添っていただけたらと、切に切に願います。」



夫の道範さんはいう。

「一人ひとりの人生って尊いんでしょう？だったら一人ひとりの選びを大切にされるべきだと思う。」と。

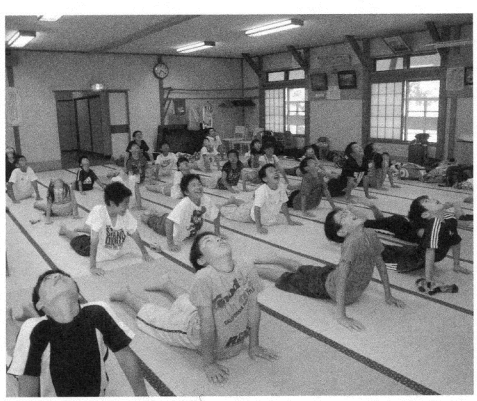
私自身、震災後、東北に関わりを持ち続けていながら、どこかで避難が最善なのでは、と捉えていた。報道やネットで得た浅学で、安易に「生き方の提案」をすることが、どれだけ福島の方々の苦しみにさらなる苦しみを負わせることになるか。そんなこともわからず、「支援」の看板を掲げて、のこのこと福島に行っていたと思うと、佐々木さん夫婦や福島の皆さんに合わせる顔がない。

どうしたら寄り添えるのかを考えることは大事なことである。しかし、今なお苦しみの中にある福島の方々がせざるを得ない「苦渋の決断」に精一杯耳を傾け、それに応えながら、「なぜ寄り添えないのか」を問うていくことがないならば、また同じように、繰り返し形を変えて被災された方々の苦しみに輪をかけていくにちがいない。お気の毒といって同情し、自分の考えが一番正しいと疑わず、そこから生まれる善意や正義をもって「寄り添うこと」とすることが多くの人を傷つけ、二重の苦しみや悲しみを生み出してしまうのだから。

キッズふくしま サマーキャンプ イン たかだ-2012-

去る八月二日から六日、四泊五日の日程で、福島（福島市、二本松市、郡山市、いわき市、南相馬市）の小学二年生から中学一年生までの子どもたち総勢四十一名を迎え、「キッズふくしま　サマーキャンプインたかだ-2012-」が開催された。昨年夏・今年春のキャンプに引き続き、今回で三回目の開催となる。三回ともすべて参加した子どもも多くいた。前半二泊は池の平青少幼年センターで過ごし、後半二泊は教区内のお寺や門徒宅など合計十三ヵ所のホームステイ先で時間を過ごした。

センターでは、苗名滝へのハイキングの他、バーベキューや花火、ヨガを体験するなどした。ホームステイ先では、海水浴や地元の祭りに参加するなど、それぞれに有意義な日



ヨガ体験

ホームステイ先での食事

程を過ごした様である。筆者も、あるホームステイ先にお手伝いを兼ねて取材をさせていただいた。

そこで、子どもの方から「海でも山でもいいから釣りがしたい。」という熱烈なリクエストがあり、魚釣りに連れて行った。その時スタッフも私もとにかく子どもがしたいと望むことをさせればいい程度の思いしかなかった。

しかし、キャンプ終了後、彼らのうちの一人が、原発事故以降、大好きな釣りをまったくできないでいたと知った。そして、今回のキャンプで約一年半ぶりに釣りができたことをとても喜んでいたそうである。

今までは何気なくすることができた大好きなことができなくなってしまった現実。一年も経つのに、まだまだ解決の見通しすらつかない重い問題があることを身に染みて思い知らされる出来事だった。ただ、少なくとも私が出遇った子たちは、そんな現実を逞しく生きている。

最近、「忘れない」というコトバがよく用いられる。もちろん、震災や原発事故の悲惨な記憶を風化させないことは大切だ。しかし、本当に忘れてはいけないのは、単に悲惨な記憶だけではないと思う。原発禍の中にある子どもたちは悲惨な現実にうつむいているだけではない。私たちと同じ時間軸の上を、小さくても逞しく生きている「いのち」なのだ。

今回のキャンプを通して、私はそんな「いのち」に出遇った。そして、その存在を「忘れない」でいたい。花火大会に参加した後の帰り道、口々に「帰りたくないなぁ。」という子どもたちを可愛く思った。

（編集委員　藤島）

ご本堂の前で

さぁ、魚釣りだ！

愚僧のつぶやき

〈お内仏の荘厳編⑩〉

最終回となります今回は、法要時の荘厳を見てゆきたいと思います。

まず打敷ですが、前卓や上卓に前面を三角形にして掛けます。他宗には、四角形にして掛ける所もある様です。この打敷の起源には諸説あり、お釈迦様の説法の座に美しい布を敷いたとか、お釈迦様がお通りになる所に泥が溜まっており、それを見た女性がお釈迦様の足が汚れない様に着ていた自分の服を敷き、それでも足りないので自分の髪を切って敷いたとも言われています。いずれにしても、仏を敬う気持ちの表われであります。この打敷は奈良時代には使用されていた様ですが、仏前で三具足をのせた机に打敷を掛ける様になるのは、室町時代頃からと言われております。

次に打敷を掛けた尊前に一対のお華束を備えます。このお華束の起源にも様々あります。

〈供笥（くげ）説〉元々は供物をのせる台（供笥）の事を指した言葉で、古くは供笥の脚に花形の装飾が付けられていた所から華足とも書かれて

いた。

〈盛物説〉昔は盛物の上に造り花を立てる習慣があり、現在でも葬儀の時に荘厳される根華餅に造り花が立てられている。古くは華飾とも書かれていた。

〈花供養説〉華束とは梵語では華厳の事であり。花を六重に列ねて仏前に備えていた。それが日本に於ては餅が重要視されていたので、花の代わりに餅を重ね備えるようになった。

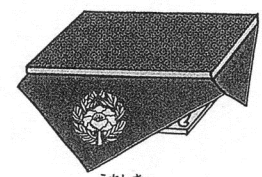
等々です。いずれにしても、何か花と関係があった様ですが、その事を忘れない為に供笥には蓮の花びらを模した方立というものが付いています。

次に瓔珞を見てゆきたいと思います。重たい法要の時は、輪灯の笠の上に瓔珞を釣ります。本来瓔珞とは、古代インドに於いて宝玉を編んで首にかけて飾った貴人の装飾具であったものが、のちに珠玉と花形の金具を編み合わせて尊前を飾る仏具となったものです。当派に於いては、一六四七年に現在の形として取り入れたと伝えられています。

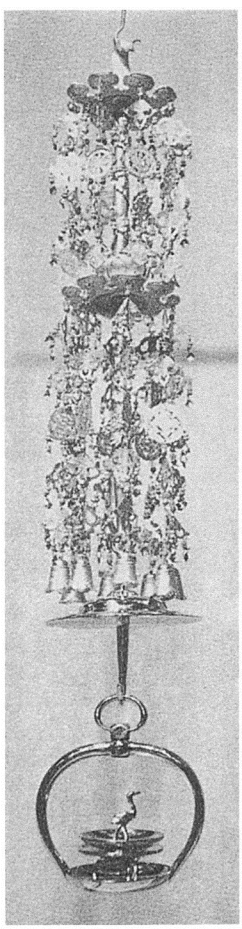
以上、お内仏のお荘厳の歴史と心を十回に渡って頂いて参りました。そこには、必ずしも真宗のみ教えに合うものばかりではありませんでした。しかし先人の方々は、それを親鸞様のお心に叶った形とし、有難い形と頂いて我々に伝え残して下さった事であります。『一切荘厳皆説法』その一つ一つのお荘厳は我々に、「ただお念仏申せ」と呼びかけて下さっている事であります。

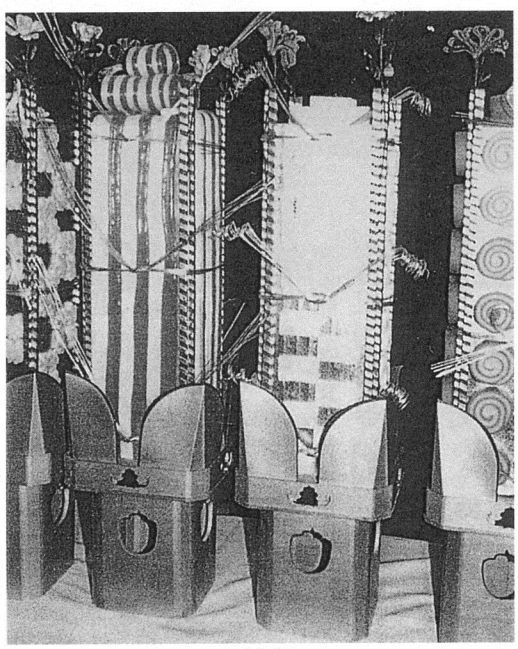
南無阿彌陀佛

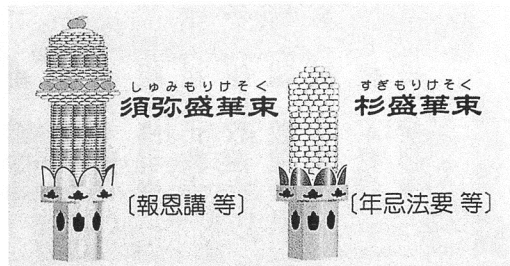
（ペンネーム　維摩教信）


打敷

供笥


瓔珞


根華餅



教務所からのお知らせ

完納御礼

二〇一二年度宗派経常費（相続講金・同朋会員志）を御進納いただき誠にありがとうございます。

ここに、早期完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第1組
大雲寺　雲晴寺　長願寺　光徳寺
本立寺　寶光寺　清雲寺　圓照寺
常誓寺　西性寺　徳正寺　正覺寺
光照寺　勝蓮寺　廣傳寺　西光寺
専徳寺

第2組
善正寺　乗雲寺　法圓寺
東浄法寺　唯心寺　寶善寺
西福寺　興順寺　大蓮寺　常圓寺
萬徳寺　教念寺　明通寺　通託寺

第3組
西性寺　正願寺　明福寺　大泉寺
光榮寺　安專寺　應満寺　正光寺

第4組
宗專寺　皆順寺

第5組
流泉寺　光源寺　林正寺　覚法寺
信光寺　寶善寺　蓮光寺　智願寺

第6組
照行寺（春日山）　勝念寺　福成寺　敬覺寺
等正寺　淨光寺　教專寺　金光寺
照行寺（東本町）　明法寺　善念寺　雲妙寺
安養寺　玉梅寺　照蓮寺　蓮受寺
養福寺　西安寺　淨蓮寺　常榮寺
樹德寺　了源寺　長樂寺　真宗寺
法林寺　淨國寺　安傳寺　長命寺
最尊寺　淨照寺　林西寺　長德寺
光運寺　本覺寺　得願寺　願重寺
光照寺　唯願寺　善福寺　佛現寺
願清寺　佛性寺

第7組
皆遵寺　入善寺　正教寺　願樂寺
照光寺　良明寺　道因寺　願生寺
誓願寺　善性寺　慶樂寺　性顯寺
專了寺　圓常寺　西谷寺　靈山寺
福藏寺　願勝寺　敬覺寺　圓了寺
唯念寺　正行寺　長德寺　明道寺
勝福寺　得法寺　光源寺　廣建寺（大谷）
明樂寺　覺願寺　慈雲寺　聞稱寺
淨嚴寺　正善寺　圓光寺（阪倉）　西蓮寺（二俣）
淨善寺（岡川）　福因寺　西蓮寺　教蓮寺
正念寺　法泉寺　本龍寺　勝樂寺
妙土寺

第8組
泉光寺　長念寺　正福寺　養林寺
本覺寺　圓性寺　等覺寺　覺善寺
勝名寺　蓮淨寺　入光寺　覺願寺
延壽寺　阿彌陀寺　稱名寺

善巧寺　大嚴寺　淨音寺　蓮休寺
西方寺　願立寺　淨琳寺　西養寺
向源寺　明善寺　慈圓寺

第11組
照圓寺　鞍馬寺　敬覺寺　本教寺
高德寺　法善寺　妙玄寺　教願寺
稱專寺　能念寺　光圓寺　一念寺
福樂寺　輪鳳寺　高源寺　了慧寺
照源寺　京德寺

第12組
善立寺　法西寺　德藏寺　養善寺
明善寺　福正寺　光圓寺　延慶寺
橫超寺　西願寺

第13組
龍覺寺（下荒浜）　信光寺　淨泉寺　願專寺
龍覺寺（柳町）　最尊寺　淨嚴寺　明通寺
松橋寺　德專寺　雙善寺　光德寺
養性寺　照專寺　西念寺　正法寺
養法寺　惠光寺　善照寺　正行寺（森本）
龍光寺　了僧寺　光遍寺　稱念寺
船入寺

（二〇一二年七月一日～
九月三十日）
以上　二百十五ヵ寺

『響流』編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。

●おくやみ申しあげます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第2組　善正寺住職　上宮　修清
第7組　唯念寺前坊守　尾﨑　ヲサ
第7組　勝福寺前住職　浅山　龍藏
第8組　覺善寺前住職　渡邉　和昭
第8組　臨行寺前坊守　宮越　幸子
第11組　京德寺前坊守　中村　ミチ
第12組　教念寺前坊守　朝川　和子

●おめでとうございます

◎住職任命
第2組　善正寺　上宮　崇
第11組　高德寺　外立　学

◎得度
第6組　善念寺　滋野美智子
第6組　善念寺　滋野　唯賢
第6組　雲妙寺　岡田　将希
第6組　本淨寺　市川　弥生
第6組　本覺寺　老野生美琉
第6組　佛現寺　齋藤　海
第7組　正教寺　鹿島　由紀
第7組　教蓮寺　近藤　拓
第7組　教蓮寺　近藤　聖子
第8組　本覺寺　八木智那美
第8組　本覺寺　八木　法智
第12組　橫超寺　堀井　沙綾

◆こもれび◆

『響流』の担当になり初めての取材が前々号に掲載された、善正寺、上宮修清住職へのインタビューでした。

寺院移転に関する事など、丁寧にご説明いただきました。また、太子堂も見学をさせていただきました。本当にありがたかったです。

実は、インタビューの中で感銘を受けたことがあります。それは住職を引き継ぐにあたってのエピソードでした。親からの言葉や上宮住職の考え、そして、どう寺院を運営していくかなどです。それは、私にとってとても生きた言葉として、胸に響きました。引き継ぐ時の葛藤や責任と覚悟のようなものを、私は自分の身に置き換えて、インタビューを聞いていました。そして、帰りの車の中で、住職としてしっかりやろう、と気持ちを新たにしたことを、今でも鮮明に覚えています。

聞法に学ぶ。縁。出遇い。様々な言葉があります。表現できませんが、道を示していただいたことに、本当に感謝しています。ありがとうございました。

（大舘）